

——昭和六十年

どんぐりの知恵伊豆の墓叩きけり

佐藤 俊子

知恵伊豆は、江戸前期の大名松平伊豆守信綱のこと。徳川三代家光の誕生とともに小姓となり、幕府黎明期に、明晰さを發揮して幕政を動かした実力者。知恵伊豆と呼ばれるほどの人物だから、きつと敬愛された人柄であつたに違いないし、善人の面影が浮かぶ。その知恵伊豆の墓の頭をどんぐりがときおり叩く。つやつやしたどんぐりの実が墓の頭へ跳ねてころがる。親しみの湧く情景である。知恵伊豆とどんぐりの対比が鮮やかで、「叩きけり」といっていながら睦まじさを感じさせる。

出羽三山閣を一つに梅雨月夜 大石 昌代

出羽三山は月山・湯殿山・羽黒山のこと。芭蕉が曾良を伴つての『奥の細道』の旅でよく知られている。この句の三山もそれを頭に置いたものであらう。夏の月ならば涼しき、秋の月ならば澄みとおつたさやけさを感じるが、梅雨の月は、ほんやりと曇り空に出て重くるしい。作者は麓から三つの山をつつむ閣へ目をめぐらし、芭蕉の長途の旅に思いを寄せる。「閣を一つに」の重い表現は、梅雨月の湿りを帯びたこの場の情景を感受している。

秋浪に乙女許すはくるぶしまで 後藤 雅夫

秋浪といっても、差し潮の運びくるさざ波でいど、風は無論強く吹いていない。十六、七の少女であらうか、裸足になつて波ぎわに踏み込んで汐の感触を楽しんでいる。「乙女許すはくるぶしまで」に含羞がほの見える。少女のきりつとした清らかな情意はまさしく秋の、それも初秋の澄んだ自然の氣息の中のもの。明るさ、静けさ、そして一少女のういういしい華やきが作者の若やぎともなっている。

——昭和六十一年

野遊びの終り太平洋に出づ 大串 章

明るい田園の風景にひたつて長い冬からの解放感を体のすみずみまで味わっているのだが、その野遊びもいよいよこれで終わりというとき、太平洋の大海原が眼の前にひろがっていたの

である。「太平洋に出づ」のさらりとした表現に、こころをひらいた柄の大きさを感じる。この句を想うとき、外房などの景がぴったリだ。野遊びの頃なら晩春、黒潮の本流も濃く速さを加えるはずである。

鳥 帰 り 母 逝 き 故 郷 か ら つ ば よ

小谷部東吾

母の逝去のため作者は幾日か故郷に滞在していたのである。帰郷した時は北へ帰る仕度の小鳥の群れが迎えてくれたのだ。小鳥が北へ引くときは二、三日で大群を作つて忽然と消え去る。母堂を喪くした心のうつろは、以後ふるさととの疎遠を胸裡に刻みこんだに違いない。そういう思いが「故郷からつばよ」という独白となったのである。望郷のこころは常に作者の胸を占めている。

唐 子 め く 子 が ひ と り 欲 し 白 牡 丹

伊藤 京子

牡丹の中でもとりわけ気品の高いのが白牡丹。大型の重い弁を打ち重ねたさまは豪華な華やかさを与える。作者は白牡丹の一本を眼の前にして、唐子のような子供を傍に立たせたいと願望する。唐子は中国風の髪形や服装をした子供。江戸時代、いわゆる唐子髷の童子が日本の庶

民の幼児の代表だった。中国西域原産といわれる牡丹には唐子が似合う。高貴な白牡丹と庶民的な唐子の取り合わせ、白牡丹のやすらぎのおのずと伝わる作品だ。

姫 女 苑 額 ひ か ら せ 木 曾 童

猿橋統流子

姫女苑は真つ白な菊に似た花卉を広げ、草木のみどりが日にも風にもはつきり感じられる初夏を飾る花だ。作者はこの年六月、小諸・木曾に遊んでこの句を得た。「額ひからせ木曾童」の親しみをこめた呼びかけから、くりくり眼をかがやかせ、額を光らせた利発な木曾の童児像が浮かぶ。「元気で立派な若者になれよ」と希う作者の温かいこころが伝わってくる。

討 死 の さ ま に こ ろ が り 隼 人 瓜 町 田 し げ き

「討死のさま」と見たのは瓜の名から触発された故であろう。隼人から薩摩隼人への連想、そして討死といえは、征韓論に敗れて下野した西郷隆盛が率いる鹿児島士族が、官軍に敗れて隆盛の自刃により終結を見たいわゆる西南戦争の悲劇。何やら判じもののような鑑賞になったが、飄逸な味を持った作品である。

白雨すぐ木曾の木の香の総立ちに

竹腰千恵子

この作品の要は「木曾の木の香の総立ちに」という感受にある。木曾谷に沿って四方にみどりを導えさす景観は雄々しくも又美しい。白雨は山から谷一帯に林のみどりを洗い、爽涼の気を漲らせる。山を洗った木の香が谷の底から立ちのぼって作者をつつむ。一雨のあとの空は限りなく青く樹々はしんかんと威をつくす。「総立ちに」の感覚を働かせた把握が、この句を大柄にしている。

線香花火つぶやき足らぬごと落ちぬ

勝又寿々子

この句に詠われたのは十センチほどの短い手花火のたぐい。松葉のような花火を四方に散らし、それが尽きると、小さな火の玉がしばらく名残のようにぶら下がってかすかな余韻をあげている。「つぶやき足らぬ」線香花火に寄せる作者の余情、巧みな表現である。(下田 稔)

春の雪貝を研ぎ出す若狭箸

田中 英子

若狭の風土がびったりと作者の身に添うた感がある。春の雪、若狭箸という明るい音の言葉、ほのかな光を帯びつつ研ぎ出される貝が結びつけ、句やかな空間を創生して、日本海の暗い冬から蘇り、春を寿ぐ心がにじみ出て、作者の美意識の有り様が窺える句である。

(櫻井康敏)

癌出来つ転びて攪む龍の玉

村松 栄子

人生の出会いとは不思議の連続。癌の絶望の淵に攪んだものが野に生う龍の玉であったことも因縁のしからしむところであっただろう。このふか紫の龍の玉の輝きが、途絶えようとする生命に一縷の希望をつなぎとめたのであろう。生命のかなしい叫びごえが聞こえてくる一句である。

——昭和六十二年

梨喰うて頭の中を晴らしけり

森田 博

梨の実のみずみずしい冷やかな感触。そして丸味を持った小さな頭のような形。香り高く、

甘い漿液の滴り、しろじろとした果肉のやわらかさ。それはまさに頭脳の蘇生の機となること必定である。頭脳という無量の暗黒の世界に対して、季節の果物が大きな薬効をはたしているところが面白い。頭の中の小宇宙と大自然の結実である梨の実との渾然と融和した世界にはえもいわれぬ味わいがある。大人の風格があろう。

今上陛下様と同齡豆叩く 勝亦 年男

昭和時代の日本は天皇とともに歩んで来た。天皇によって日本の国があったともいえる。今上陛下様という尊称にもその時代の天皇に対する偽らざる国民の感情が語られている。その天皇と同齡であることに一種の誘りと親しみがあるのであろう。この句の主人公は平均的な農民であろう。豆を叩いて暮らしている姿には平和なやすらぎと満足感があろう。天皇と豆叩く農民とのとり合わせに俳諧の味わいがあるのである。

鶏頭のなまなましが抜かれけり 荒井 正隆

焰のように燃えさかる色あいと太々しいがっちりとした茎、そして秋渴きの地にも決して萎えたりしない強情さは粗野というにふさわしい。掲句の鶏頭はいままさに生命の盛りの最中であるもの。それがいきなり根こそぎ引き抜かれてしまっていたまじさ。だがこの鶏頭、ひき抜かれも捨て去られてもけつして弱音を吐かない図太さを持っている。それは自己存在の象徴ともいえるようである。

山眠り火種のごとく妻が居り 村越 化石

いろとりどりの色彩や形を経てきたあとの山の姿には一切を含有した無の世界を示すものがある。また山国のきびしい冬の期の埋火には温かさ懐かしさの凝結がある。いわば埋火は山国の冬の生命の根源のようなもの。そういう存在としての妻に思いを寄せているのである。「山眠る」の雄大な世界。火種の凝結した存在の意味ふかさ。そして妻の存在によせる思念のふかさ。一語一語がゆるぎなく噛み合って大きな宇宙の在り方にまで迫っている。

笹鳴や野良着にもある好き嫌ひ 影島 智子

農への愛着のきわめて強い句。情の濃い句といえる。笹鳴きの藪の明るさ。野良へ出かけるにしても身だしなみを忘れない女心の微妙な働きも感じさせる。作者は富士の裾野で土と親しむ毎日を送っている。もしかしたらあの秀麗の富士の容姿に適う野良着に着替えてゆくのかも

知れない。ゆったりとした大景に身を委ねての一日一日の暮らしの息吹が明るく健康的なひびきとなつてきこえてくるのである。

雨が雪にかはりて年のあらたまる 佐々木とく子

雪は瑞兆といわれる。奥羽山系の豪雪地帯の湯田で、新しき年に入るその日に雪が降りはじめたのは、この土地に生きる人々の本来の生き方に落ち着くことなのであらう。長い冬の積雪はじつと耐えしのふことであると同時に、祖先よりの生活を引き継いでゆくことであり、また来るべき春のよろこびを待つところでもあるだらう。覚悟をきめた不退転の思いの強く感じられる句である。

臘梅の香のしばらくを軒づたひ 田中 菅子

臘梅はやはり異国情緒の豊かな花であらう。作者は永らくの大阪暮らし、大阪の町並が肌にしたしくしみわたっている。商都大阪には臘梅の香りがふさわしい。この臘梅の香りが、知りつくした町並にいつそうのなつかしさを添えている。けっして気負わず、ごく自然な息づきのなかに香り高い親しみを感じさせる。なつかしい生活の味わいとやさしい人柄の匂いの漂って

くる句である。

布包み仏頭と知る寒さかな 田畑 幸子

「仏頭」はおそらくは仏の頭部を鑄造したものであらう。よく寺院の書院などに入ると床の間に安置されているのを見かけたりすることがある。また仏具店とか骨董屋の店先に厚い布で覆われた荷を見かけることがある。その包みが仏様の頭であると知ったとき、にわかに寒気が身に沁みわたってきたのである。仏頭と寒さとのとり合わせには厳しい世界が感じられよう。この世の深淵にある恐懼をかいま見せてくれるような句である。

白鳥を迎ふどの子も爪先立 太田 土男

一句の焦点は「爪先立」にある。待ちに待った白鳥の飛来をよろこんでいる子供たちの心のはずみが大らかに伝わってくる句である。野を越え海を越え渡ってきた白鳥を迎うるに水辺の鄙びた子供達の無垢なところがふさわしい思いである。手を振り背伸びしてこの年の白鳥を迎える喜びが全身を通して表されている。作者の人柄の豊かさが伝わってくる思いがする。

一言を申さんと水芭蕉かな 竹田 恵示

水芭蕉は清涼と超俗の思いのそなわっている花といえる。作者はこの水芭蕉の花からその花のことはききとめんとしたのである。水芭蕉の語るのはこの世の初夏のすがすがしさを讃えることばであつたにちがいない。あるいはまた脱俗の僧の呟きの一言であつたかも知れない。譬話のおもしろさに俳諧の味わいがある。

(持田石映)

水平線近づけて麦熟れにけり 持田 石映

麦が充分熟れてくると一種独特の風景が広がる。以前に滋賀県近江でみた麦秋、夕日の沈む頃は圧迫されそうな迫力に顚顚がズキズキする程感動したことがあつた。掲句の「水平線近づけて」の措辞は強引なまでの表現であるが、遠景を眼前に把握する手法である。感性と諷詠の確かさで力強く描かれた、絵画的発想の説得力のある句。

月の夜の金泥と化し墓交る 中澤文次郎

墓は一見不気味であるが、よくよく見ているとその容姿にどことなく愛嬌がある。俳句は出会いであり、その一瞬をどう受け止めるかは作者の内蔵する世界による。月明に繰り広げられる絵巻の中の墓は、作者の深い詩質の高揚に依り「金泥と化し」の言葉を得て一句に莊嚴さを与えた。「この山の真如の月とひきがへる 林火」師恩を厚く思う作者の心のどこかにこの墓が棲んでいたのではないだろうか。私にはそう思えてならない。

根こそぎの夏草流れ日本海 下田 稔

叙景句としては受け取りがたい。先ず「根こそぎの夏草」が主眼である。大地の根を覆され命の場を失つた夏草は、厳しい日本海の背後に作者の沈潜した眼と心の奥にある何物かが捉えたものであると思う。私は以前にこの句のことを宇宙の空間の句として受け取りたいと書いた。少々気障だが、いまもつてこの夏草は私の海に生き生きと躍動しながら流れている。作者の姿勢に諦観と理想を志す世界を見る一句として受け止めた。

祭好き馬好き相馬遠しとせず 元吉竹瓶子

直接野馬追という言葉は出していないが、それを踏まえている。「相馬遠しとせず」は作者

が故郷を離れての思いか、或いは若い頃を回想してのことか。私は後者の方と想像する。行事を詠むことは至難であるが、「祭好き馬好き」の弾みのよい語で、破調にも拘らずリズムが良く読む程に快い響きがあり、作者の体温を感じる風土の句として好感が持てた。

施 餓 鬼 幡 青 黄 赤 白 黒 と 貼 る 遠藤 止観

この風習も昔は全国的にあったそうだが、今は殆どない。作者は静岡県浜名郡新居町の古刹、本果寺の住職。ボランテア運動にも積極的に働き、多忙な日々にも拘らずこの五色の幡を自分で貼られる。お手製の心の籠った幡に亡者への祈りと慈悲深い心が通う。止観さんならではの句。

切 先 に て 人 数 を 読 み 西 瓜 切 る 山上カヨ子

先ずこの句から想像できるのは刃先が触れば弾けんばかりに熟れた大きな西瓜。キャンプ場での場面でもあろうか。西瓜を囲む子供、或いは大人の顔が上五の「切先にて」の断定に集中し、さまざまな表情が見えてくる。又西瓜を切る人の緊張感も伝わり嬉しい。歯切れの良さがこの句の魅力。切れ味の良さとユニークな句の詠める人である。

竹 夫 人 連 れ て ジ ャ ワ より 留 学 生 雑賀 淑江

留学生を迎える空港でのことか。珍しい光景である。竹夫人の季語がよく活かされているのは作者が竹夫人をよく知ったことと思う。読んで爽やかな印象深い佳句である。例句の少ないこの珍しい季語も、このような形に詠まれれば新しい時代の貴重な一句といえよう。

— 昭和六十三年 —

柚 小 屋 の 一 升 壘 に 蛍 か な 竹内 旦

蛍の句としては面白い作品。山深い溪流には蛍もよく翔ぶであろうし、まれには小屋に入ってくるかも知れない。季節の風物は男達を慰めてくれる、体を使った仕事を癒すにはやはり酒だ。既に一升壘の空いたのも数本あり、その内の一本に男の手から蛍を入れた。殺風景な柚小屋に明滅する蛍の光はひとつの空間を醸し、ロマンと幻想の世界をつくり、男の優しさが伝わってくる。

裏山のふつと近づく盆仕度 原田 桃里

・作者は仏壇を清め、家の清掃をし、生い茂る雑草を刈った。こまごまと用事を済ませ先祖の魂を迎えるのみになった時、いつも眺めてきた裏山が急に近づいたように思えた。「ふつと近づく」の措辞は先祖への敬虔な気持ちを表出している。景と感覚がゆったりと融合し、懐かしい心惹かれる句として好ましい。

年々に問ふことふゆる萩の花 佐野 美智

佐野さんは勤勉家で努力家であり、常に前向きの姿勢を崩さず謙虚にこられた人。「年々」の呼びかけがそれを如実に示している。「問ふことふゆる」は自問、そして自答を意味する。座五の「萩の花」は亡き林火先生のお庭に咲く花のことであろう。この萩も白田垂浪先生から頂かれたものと聞き及んでいる。萩の花に作者の寄せる思いが濃く滲む。

——平成元年

豆柿や空動きまで 奥丹波 広岡 仁

たわわに実る豆柿は太陽と風の恵みを受けていよいよ艶やかに熟す。その先は只真つ青な空があるのみ。「空動きまで」は極限の青を象徴するにふさわしく「奥丹波」の設定がよい、切字を用いて上五に据えた季語の効用。必要以上に感情を移入せず対象を物によって把握し表現する句は力強い。あわせて色彩の対比手法が作品の印象を深める。
(田中蒼子)

小春日の石に笑窪のありにけり 井上三千女

句は上五で軽く切れて冬の暖かな大きな空間を描き、石に焦点をしばらく込んで一気に詠み下している。爽やかな一句である。とろけるような小春日のなかで、石に僅かな翳りが見える。それを愛らしい笑窪と見たのである。そう見えたのは感受性が豊かなのである。句のリズムも伸びやかである。

白鳥の声張りづめに海渡る 笠井 操

白鳥の声は太く低い。北国の人は冬のはじめになると白鳥を待つ心が強い。来れば心が落ち着き、冬に備える構えも定まる。「声張りづめに」が壮絶である。爽やかな姿態に隠されている一面である。渡りの途中で命を落とすのも少なくない。宮城県蔵王町の刈田嶺神社には、白鳥塚があり、先年訪れた時には新しい墓標も立っていた。かつては人の生活に密接にかかわった鳥であった。

歩みても歩みても御所冬霞 広 和子

暖かい日には、冬でも霞がたなびく。春が近い兆しでもある。そんな寒さの和らいだ朝の御所のまわりをゆつくりと歩いている。待春の気分を横溢させながら、春へ向かつて歩いているようでもあるし、歴史を逆のぼっているようでもある。

初松 籟 松下村塾 開け放つ 白松 達夫

白松氏は山口市在住。句集に『初松籟』がある。初詣の折りでもあろうか、厳寒の時期にもかかわらず、松下村塾が開け放たれている。そこへ松風が吹き抜ける。淑氣に満ちた句である。松陰の志堅固で颯爽たる姿さえ点じる。土地人の土地への同化の結果の一句である。かく土地に執することは、誰しも追及してよい。

諒 闇の朝の訪づれ三十三才 杉本 寛

自註を引用する。「平成元年一月七日、珍しく小さな鳥が庭に来ていた。よく見れば三十三才、万感の思いを諒闇の二字に」格調が備わった。加えることはない。これをもって昭和は終わった。昭和への思い入れは人それぞれ単純ではない。戦後五十年に立つて振り返れば、十分な反省に立つて、再び戦争を繰り返してはならないとの切なる思いがある。

ころころときびきびと母龍の玉 村上喜代子

私の母を詠みながら、それを超えて日本の母を描いている。「ころころときびきび」とが巧まない表現のように見えて、母の生態を描いて充分な重みがある。ここには確固とした日本の母がいる。「龍の玉」の季語の働きは磐石である。季語に万感の母への思いが凝縮されている。

白玉をつるりと飲んでくわんぜおん

櫛原希伊子

ここに描かれているのは「白玉をつるりと」飲んだ私と観世音菩薩があるだけである。観世音菩薩が眼前にあったのか、またそう唱えたのか、それは一切分からない。しかし、どちらでもよい。白玉をつるりと飲んだ瞬間におのれが観世音菩薩に変身したのである。「つるり」が極めてリアルである。私は、希伊子菩薩誕生の一句とみて納得している。

身を飾るものみな捨てて桜見に

鳴崎 茂子

ふっきれた爽やかさがある。桜への思いは年齢に応じて変わる。身を飾るものも然りである。「みな捨てて」が潔い。ある年齢になれば実質こそ本意。そういう人生がふと見えたのである。高い調子で言つてのけながら爽やかなのは「桜見に」という据え方にあるうか。

朴若葉谿音幹を登り来る

土田祈久男

深山幽谷。朴の木は、谷の中心から伸び来たつて、丁度木の梢から見下ろすような位置闊

係に作者はいる。梢の切先のように突き立っていた芽がほぐれて大きな葉が広がったばかりである。葉の密度はまだそれほどない。隙間だらけの空間があるからこそ谿音は幹を登り来るのである。季節の微妙な移りを確かに捉えた。谷の深さもでている。この感覚の研えをよしとしたい。

岩手山かろがろ見えて花林檎

昆 ふさ子

岩手山は標高二千余、奥羽山脈の一角にどっしりと座る。あの山を見ると、ここに住む人の思いや生き方に影響を及ぼさずにはおかない山だと思う。林檎の咲くのは四月下旬頃。山には残雪があるが、緑が濃くなって、確実に季節が動く。林檎の花は梨の白さに比べるとやや赤味を帯びて、そこはかとないう鄙びた素朴な味わいがある。「かろがろ見えて」に、長い冬に耐えて来た東北人の心の弾みがある。爽やかな土地の賛歌である。

捕へたる人を一瞥大鯰

岡田 透子

鯰の顔はなにやら人間の風体をしている。見ようによつては愛敬もある。その鯰にうらめしそうに一瞥されたのである。そこは大鯰の貫禄で、観念して控えている。一方、人のほうは得

意満面である。この対比が面白い。鹿島神宮の門前には、鯰を食わせる店が並んでいる。あの辺りなら今でも捕れるのであろう。

(太田土男)

——平成二年

生身魂抱き湯に欠伸し給ひぬ 竹中 龍青

信州にあつてこの人の俳句に対する息づかいは極めてねんごろである。何故か、師林火の純粹な意味での作風を継承する作家は地方に多い。化石・麦青・文次郎・龍青皆然り。句姿、情の通わせ方、すべて林火に通ずるのである。さて、仮に掲句がさる句会に投句されたとして、作者名を名乗る段になつて「林火」と一声あつたとしたら如何であらう。「さてもありなむ」とは誰しもが思うところではなからうか。それ程この句は林火の教えを如実に反映しているのである。

河 駆 け て 天 山 駆 け て 馬 肥 ゆ る 今井すえ子

チマチマした日本的風景の域を遥かに脱している。元来「馬肥ゆる」は匈奴が、秋になつて

馬肥え、弓が強くなると、漢土に入寇して来るといふ故事に基づくという。その意味では掲句は里帰りをしてなつた句と言えようか。上五中七の畳み込むような語調は、入寇匈奴の騎馬軍団の蹄の音を恰も聞くが如くである。

雪 吊 り の 松 満 月 を あ げ に け り 富田みのる

この景の雪吊りの松を一本と見るか、林立する幾本もの松と見るか。即ち仰ぎ見ての近景と見るか又は俯瞰の景と見るか、それぞれ解釈は自由であつて愉しい。筆者の好みを言えば巨大な傘を半開きにしたような雪吊り松を下から見上げる構図、彼の北斎の版画的縦長構図を佳しとしたい。

氷 柱 落 ち 既 より 猫 と び 出 せ り 中山砂光子

氷柱の落下音に既より飛び出したのが猫。猫に仮託して既ここには、洒落た「既出し」の先取りがあるが、読者にはそれとは感得できぬ程に淡々としたもの。読者の深層心理を刺激してくるもの、それを句解と称して開陳すれば大方の読者は「釈然としない」といったところが一般的であらうか。所詮句解とは読者の天の邪鬼的根性との戦い。ならば黙つて掲句を丸ごと

呑み込んで腹で味わえとでも言っておこうか。

雪女郎に覗かる山の美容院 後藤 房枝

雪女郎が髪を結ってもらうならどんな髪型を所望するであらうか。しかしながら髪結いは本日超満員。窓越しに中をちらつと覗き込んで、待つべきか戻るべきか決めかねている様子である。雪女郎を詠むには極めて生真面目におどろおどろしく正攻法で詠むか、不縁な現実世界との関わり合いをチョッピリ滑稽味を添えて提示するか、ふたとおりの方法があるうか。無論当句は後者。滑稽が行き過ぎないようにほどほどに納めたところがにくい。女性ならではの句である。

不意の客紅梅の間に通しけり 上野さち子

さらっとした味わいがこの句の眼目。お茶漬けの味である。「紅梅の間」とは紅梅を活けてある一間のことか、あるいは軒端の梅が見事な一間か。どちらにしても作者の気さくな気分が横溢している。

朧夜の止り木に足忘れをり 市川 翠峯

この句に通底しているそこはかとした味わいは一種ダンディズム。しかも中年のそれが似つかわしい。場所は横浜、とある場末のカフェ、と先ずは物語性十分な句である。さりげなく「止り木に足忘れをり」と言い止めたところにこの作家の年輪が窺える。

鷹柱崩れ一氣に渡りけり 松田 雄姿

何せこの人の呼吸は大きい。中途半端な息継ぎはしないのである。一氣呵成にすうっと句を吐かねばすまないといった風情。つられて読者もこの呼吸に呑み込まれる。この幻術がこの作者の作風であると共に、真情である。生業が元警察官ということもあり、どの句にも真情が通っている。この句にその典型をみる。

外寝して瓜番瓜と異ならず 金丸 鐵蕉

中国詠であるらしい。「瓜番瓜と異ならず」とは、しかとした写真ながらしかとした滑稽。

写し取ったものがおのずから滑稽味を湛えているのである。と言つては嘘になる。この句にはかなり強い主観が裏打ちされていて、その主観が写実のオブジェクトにうまく包み込まれているのである。そこに作者の工夫と力量がある。一方、万物の霊長たる人間がその物(瓜)と同一視されている点にこの句の面白さがあるのであるが、それも暗闇に雑然と物が放り出されていても不思議でない外地——そのような状況設定があつてこそ句は俄然引き立つのである。季語「外寝」が採用される所以である。

葛月夜帰郷ごころに峠越す 波多野蟻仗

「葛月夜」とはいかにも渋い。作家年齢に呼応した季語の選択とみたい。「帰郷ごころ」という懐旧的な言葉に被せて、「葛月夜」と捉えた作家の意図は、あるひとつの年齢にこそ寄せての感懷を刻印したかったに相違ない。その思いは「峠越す」の措辞に至つて全うされている。

——平成三年

伐り伏せの竹のみどりに年うつる 林 香燿子

句に句いがある。「濱」という結社の本筋——におうような抒情を臆面もなく打ち出した佳句。恰も移りゆく年も緑に染まるかのようである。「みどりに年うつる」なる措辞がこの幻覺を生むのである。また、「伐り伏せの竹」と言いとつた大掴みな把握も一句に豊満さを与える。正に「言葉はやさしく思ひは深く」を実践しているのである。(高澤良一)

ずしずしとずしりと猪の威銃 茂里 正治

この句の背景は猪の本場、丹波の篠山であろう。作者は関西の風土を詠んでどちらかといえば温雅な作風であったが、掲句はそれから飛躍した。音という直截に心に響くものから実を描き特色を出した。(櫻井廉敏)

点字もて長恨歌読む鳥雲に 金子 晃典

唐の玄宗皇帝と楊貴妃のラブロマンスを描いた、白楽天の長編詩「長恨歌」。それを「点字」で「読む」。しかも作者の場合、旧作に「風花や舌に点字の琵琶行読む」(昭60)もあるように、「舌読」である。我々の想像を絶する、大変困難な作業なのであろう。

褒められて叱られて子はふらここに

武子都史郎

「子」どもには、このようにうれしに付け悲しいにつけ自然と足の向く、心の拠り所といふべき場所が存在する——私たちサラリーマンならば、さしずめ居酒屋ということになるうが——。作者の少年時代の経験が重ねられているのかもしれない。「子」どもの姿が、活写されている。慈愛に満ちた眼差しは、人間の幅の広さを示しているといえる。

子の汗をくりくり拭いて又放つ

恩田 甲

「くりくり」という擬態語の適切な表現が、一句の眼目である。「子の汗をくりくり」と力いっぱいタオルで「拭いて」いる親の様子が浮かぶ。次に、力を入れているのだが、細心の注意を払っている心理も伝わる。そして、「くりくり」と太った幼「子」のいきいきとした表情が見える。「くりくり」という語感もまた躍動感に溢れていて快い。

永き日の亀はろかより来し如し

櫻井 康敏

「亀」の容姿(?)をつくづく眺めていると、不思議な気分におそわれることがある。作者が、遠い所から遙々やって来たようだと思つた気持ち、納得がゆく。亀は万年と言われる位だから、我々が生きている時間よりも、もっと悠久の時間を生きているのであろう。「永き日」という季語の据え方も、そんな悠久の時間に通じていて、ふさわしい。

植ゑし田の律義に一处歪みをり

三輪 洋子

掲句については、松崎鉄之介先生の言葉を借りよう。「田植機になると……それを運転する人の癖で一度一々所曲がつてしまうと、同じ間隔を取るために、以後の筋が皆曲がつてしまうのである。その曲がつている筋を律義であると見たところに面白さがある。律義という言葉が如何にもお百姓さんの律義に通じて、ほほえましくなってくるのである」

今生の外に身を置き端居かな

速水ふさ子

「今生の外に身を置き」とは、重く、深い言葉である。作者はきつと、激しく、厳しい人生を生き抜いて来たに違いない。それでなくてはこの言葉は出て来ないはずだ。「端居」は、現在の作者のいる場所であり、心の有り様である。端的に言えば、諦念。しかしこの諦念は、諦め

でも悟りでもなく、捨て身の覚悟から得た自在境とでも言えようか。

竹秋の静けさ海へ及びけり

坂根白風子

静かな句である。深い句である。いわゆる新しい俳句とは言えないかも知れない。言い古された言葉ではあるが、新しさとはやはり深さに行きつく。掲句はそういう意味で、永遠に古くて新しい俳句である。

ふかぶかと土に水滲む土用入

山部 淑子

「ふかぶかと」と見て取ったところがよく、「土用入」という時候がよい。「土用入」は七月二十一日ごろ。「土用」と聞くだけで、日射しの強さ、暑気の苦しさが思われる。従って、「土に」「ふかぶかと」「滲む」「水」のよろしさが、立ち顯れるのである。

農 吾れの怒鳴りたくなる冷夏かな

中川 博秋

茂里正治氏が掲句を採りあげ、「今年の夏は天候不順で、土曜日曜といえど雨という日が多

かった。我々にすれば『又雨か』で済むが、専業農家である中川さんにすればそうはゆかない。『怒鳴りたくなる』で中川さんの怒りがもろに伝わってくる秀句」と評価。平成五年も大凶作が襲い、農政不在を暴露。いったい何時になったら、中川氏が「怒鳴」らなくてもよい時代がやって来るのであろうか。

磐 座をはたとすべりて穴惑

岡本 庚子

神霊が降臨し鎮座する神聖な場として人々に畏れ敬われている山中の大岩を、「はたと」「穴惑」が「すべり」落ちたのである。「すべり」落ちるようなぶざまな姿をさらすのだから、この蛇、神の化身や使いではあるまい。大岩から落ちた蛇はさぞかし仰天したことであろう。厳肅な雰囲気の中に、いささかのユーモアをたたえ、微笑を誘われる光景である。（甲斐遊糸）

——平成四年

藤の実の雑俳あまた吊るごとし

中山フジ江

掲句の気味合いから感じるのは、藤の実が沢山ぶらさがっているのを見て、咄嗟に「雑俳」

という言葉が浮かんで来たことである。この時に一句が完成されたものになった。雑俳を蔑んでいるのではなく、憐れむのでもなく、ありのままを感じた。胸中に盛りの藤を描きつつ、眼前のものを慈しんでいる。作者の心に掠めた俳句人生への思いでもあろうか。作者が意識していない俳諧の味がある。

残されて星と交信くわりんの実　　谷　　けい

作者の明るく前向きな性格の一端をのぞかせて楽しい句である。ただ一個残された無骨な模槓の実から、星と交信していると発想が飛躍したのは感性のはなやかさであるが、掲句が成った背景として山国の澄んだ夜空が目には浮かんでくる。

新しき毛布に情のすぐ移る　　水口　楠子

作者の豊かな感受性とユニークな発想は定評のある所であるが、掲句はさり気なく人間の心理の普遍性までを表現し得ていると思われる。新しき毛布に対して、情のすぐ移るという人間の泣き所を突いた平語が、この句を新しいものに仕上げ、さらには人間の移り気な心理をも匂わせて、平凡な材料から深味のある句となった。

僧と合ひ又白息の僧と合ふ　　毛塚　静枝

一読、清々しさと敬虔な心が伝わる掲句は蓋し、作者会心の作であろう。東京句会において、句稿が回って来て掲句を見つけすぐ書き抜いた。作者を思い浮かべながら、どういうわけか本選に洩らしてしまった。しかし、この出会いから私の胸の奥に息づいて、折に触れ風のように泉の如く、私の胸にひろがり、私を浄化し、豊かにしてくれる。

いつも死と近く生き来ぬ寒卯　　八牧美喜子

生きていること生かされていることへの謝念が惻々と伝わってくる句である。作者の境涯を知らずに掲句に触れるのは難しいことであるが、この句の持つ普遍性に誰でも共感するであろう。生きている証として死を感じていることにおいて、生き方は健全であり、精神の強靱さを思わせる。その精神の顕れとして、寒卯が御仏の慈光を湛えて作者の掌にある。この寒卯は生みたてのものと思いたい。その温みは、生そのものの温もりとして読者に伝わって来る。

シヤンソンに溜息漏らす雪女 宮崎とき女

女性ならではの発想で雪女に生身の体温を与え、幻想の世界が現実の光景となった。掲句の雪女は知的でロマンの色が濃い。外は地吹雪の起る月夜。エディット・ピアフの愛の讃歌がバラ色の人生を聴いているのであろうか。微かに虎落笛が聞こえたとき、ふと我に還り浮かんで来た句のように想像される。

生真面目な木と誰もいふ冬櫛 高澤 良一

第三者の言った言葉を無言で肯定した表現を採っている点が新しきを出している。作者は冬櫛を生真面目な木と思って見ていた。来る人達が自分と同じように思っているのに興が起こり、冬櫛と波長が合い一句が成った。何気ない中に確かな写生があり、透明感の裡にほのかなユーモアを湛えている。眼前のものを素早く捉える写生の力があつて、掲句が生まれたのである。

魂を上へ上へと辛夷咲く 小林 道子

キタコブシの咲く様を的確に写生して、北海道の遅い春の訪れを大らかに讃嘆している。青空の中に微塵の光が滴ちてこえを挙げている。深く呼吸した躰から抜け出た魂が光と風に乗り、飛翔を始めている。

母のセル着ることもなくなつかしむ 野辺 祥子

亡くなられた御母堂の若い頃のものであろうか。母が着ていた齡を越した今、まだ色褪せていないセルに触れて、幼い頃の母の体温を感じているのだろう。更衣に颯と風が吹き抜けてゆく。亡き母への思いと、消えてゆくセルに時代の移り変わりをも合わせて、感慨を催させる句である。

(櫻井康敏)

退院のわが家にこぞる沈丁花 篠原 木綿

かなりの大病であったと思われるが、それだけに退院の喜びは大きい。「こぞる」の具象に

その喜びが如実にあらわれていよう。いち早く春を告げる香り高い花だけに、生き得たりの感慨がいつそう伝わってくる。石田波郷は「俳句は私小説」と言ったが、人生の折々の感動を言い留めることは俳句の原点であろう。

田が植わり生毛のごとくそよぎけり 箱崎マサノ

植えたばかりの田の水面から覗く苗を、「生毛」と見て取った所にこの句の手柄がある。早苗がひよろひよろと風に吹かれるさまはまさにうぶ毛。成長して青田となり稔田となる景がこの言葉に重なっている。写生を越えた写生句と言えよう。比喩はコロンブスの卵であり、一回性のもの。もう植田を「生毛」とは誰も言えない。

すかんぼや問ふたび道の遠くなり 神長 裕子

吟行と称して野山をうろうろする俳人は、税務署の署員や新聞記者と間違われたりもする。この句もそんな折の情景であろう。近くなるはずの目的地になかなか辿りつけない不安感、それもまた楽しとする心が、「すかんぼ」という季語によく現れている。何でもないことが、俄然生き生きしてくる不思議。これを季語の力というのだろう。

鉄斎の富士くろぐろと夏座敷 岡田 鉄

句は明快で説明はいらない。表現の歯切れのよさ、粹な句仕立ては作者の面目躍如たるところ。涼風の吹いてきそうな佳句である。「鉄斎」は明治大正期の水墨画家、富岡鉄斎。

風呂を焚く背後を遍路過ぎゆけり 川上なみ子

特作「えひめ大島・島四国」は、単なる吟行詠に終わらず、自らも遍路のころとなつて作った、思いの深い作品群として高く評価された。遍路道はその土地に住む人々の生活と溶け合つて存在している。掲句は、日常の営みである。「風呂を焚く」土地人と、祈願の行脚をつづける遍路との、一期一会の思いが過不足なく表現されていてあたたかい。

曼珠沙華蕊といふ字にひらきけり 甲斐 遊糸

高校の国語教師である氏の句は、じつに明るくあたたかく深い。父母を詠み妻子を詠み教子を詠む人生肯定の姿勢に大いに勇気づけられるのである。その後、作者は確実に句材を拡げ、

句境を深めてきた。本来の抒情に太い輪郭がそなわってきてもいる。掲句は、そういった氏の新しい句境のもたらした成果のひとつである。曼珠沙華の咲きさまを蕊という字のようだと表現したところ、斬新な把握。写生から入って実態へ迫る渾身の一句といえよう。

富士に身を乗り出して松手入かな 川村 紫陽

富士市在住の人にとって、富士山はごく日常の景であるだけに、かえって詠みにくいと聞く。旅人が憧れの気持ちで詠むようには詠めない。しかし、掲句は富士を生活の場とする人の句として成功した作品と言えよう。「富士」と「松手入」の取り合わせは、格があり瑞々しい。ことに「身を乗り出して」という措辞は、日々富士と親しんでいる人ならではの懇ろさがある。

—平成五年

人臭さ失せて深吉野枯れに入る 藤野 智弘

大阪に住む藤野氏は、関西をホームグラウンドとして詠うことを心がけているようだ。何を詠うか詠いたいのか、という執するものを持つことは、俳人として大切な心構えと思う。掲句は

深吉野を幾度も訪ね、知り尽くした者でなければ詠めない句。吉野は古来いくたびも政争の繰り返された土地である。深吉野の枯れを「人臭さ失せて」と結びつけたところ、吉野という風土を見事に掴んでいる。

百歳の母を祝ひし後夜長 久保 龍

「百歳の母」は久保氏のご母堂であるが、齢百ともなると、もはや個人的な母というよりは万人にとって大切な「母」といえよう。百歳のお祝いができることはなんともめでたく、格別なものがある。秋の「夜長」は、そんな母のことを想うのにふさわしい時である。

夫と生きし外の世知らず白障子 田淵ひで子

「夫」とあるのは、山岳写真家であり、高山蝶研究家としても高名な田淵行男氏のこと。安曇野のお宅へは、林火先生も鉄之介先生も訪ねておられる。掲句、その行男氏亡き後の真実の表白であり、夫恋いのうたである。「白障子」がなんとも美しい。誠心誠意夫に仕えたひで子でなければ詠めない句。

(村上喜代子)

帚木の髓まで紅葉したりけり 黒坂 綾子

まず「したりけり」と断定的に打ち出して、紅葉の朱を鮮やかに表出している。とらわれな
い自由な表現で「髓まで」と歯切れよく力強い。作者の作風の歯切れよさ、明快さをよく表し
ている作である。帚木はこまやかな、やさしい姿を見せるが、その名前からもやさしみが感じ
られる。紅葉だけでも赤いのに「髓」の一語で、髓の髓まで深い真紅に染まった帚木が鮮明に
浮かぶ。

攫はんと千鳥へ怒濤逆巻けり 郡司 野鈔

「攫はんと」が一句の眼目。全てを言い尽くしている。何の抵抗もできない可愛らしい千鳥に、
襲いかかろうとする逆巻く怒濤。「攫はんと」とは、まことに上手い擬人化である。見過ごし
てしまふような自然の一風景に目を凝らした作者独特の見方と、面白さが何とも言えない佳句
となっている。

淡墨のさくらに月の泊りけり 近藤 一鴻

淡墨桜に対する作者の思いが切々と伝わって来る。作者は、昭和四十六年、林火先生と根尾
を訪ねている。「淡墨桜風立てば白湧きづる 林火」「淡墨桜山の天日五衰なし 一鴻」掲句は、
この年から二十有余年を経ての作。作者はこの間、何回か根尾に遊ばれている。また一方、高
野山南院の林火句碑に、淡墨桜銘の枝垂桜を献木、植樹されているのである。作者にとって淡
墨桜は師林火に心つながる特別の桜であり、感懐一人であろう。

置き去りの蜂蜜 こごる熊の罌 法月 幸子

「置き去り」で罌を仕掛けて相当期間経っていることがわかる。罌はどんな仕掛けになってい
るのか。相手は熊であるから相当大掛かりなものであろうが、熊の方が利口でなかなか掛から
ないのである。作者は出逢ったよき句材を、じっくり腰を据えて凝視している。見たものを力
まず、素直に詠われている。「こごる」にその発見の喜びが、押さえた形で表出されていて、
この一点について引き込まれてしまった。

こごみ摘む天平の世の政庁跡

桜井 菜緒

察するに政庁跡とは国府のことであろうか。「こごみ」は主として東北地方の春の芽立ちの時の呼び名であるが、季語と天平遺跡がびたりと合う。明るく、清々しい句。作者は仙台の出身。みちのく人らしく、土地の歴史と風土のこまやかなものに優しい目を向け、じつくりと詠っていると思う。

ししうどの力まかせに咲かむとす

竹内美知子

ししうどの力強い、野性味を表現して充分。若い作者の若さ溢れる句に敬服。感じたままを自由に言葉に出している。「力まかせ」と断定できるのは、ものをよく見、ものの本質を掴んでいるからである。「力まかせ」がゆるぎない。

断念とは斯く牡丹の崩れざま

小山 梧雨

比喩が的確。「崩れざま」とはまことにすばらしい。崩れる牡丹の比喩はいくらでもあるが、

掲句はその中でも出色の句であろう。断念して崩れゆく心を、牡丹の崩る様にたとえて見事である。残念さとは裏腹に、決断したあとの潔さも感じとれるのであるが、それは作者の明るい人柄から来ると同時に、花は散るものとの宿命を思うからであろう。

魂送り 帰りに持たすものなかり

児玉 修

「作者は近年突然の喘息の発作で長男を亡くした。この仏は亡くした長男に対するものである。盆には必ず来られた長男一家である。帰る時には何かを持たせて帰したことであろうが、仏となつてしまつては持たすべきものがないという述懐につながつたと思える。親としてのわびしさが込み上げて来ようか」鉄之介先生の評である。作者独特の見方の面白さがあつて、どこかとぼけた味が出ている。発想の自由さが生んだ作といえよう。

束ぬればゑのころ草も花めきぬ

神谷 瑛子

作者はこういうやさしみのある句を詠うかと思うときどき、どきつとさせる女の情念のよな句を見せる。この大きな落差はどこから来るのかと不思議に思う。えのころ草の穂を上げて穂先を小さくし、蛙の鼻先に持つてゆくと蛙が跳びついて来る。その瞬間に引っぱり上げ

ると蛙が釣れる。それが楽しくて下校時によく遊んだものだ。掲句はそういう故郷のメルヘンの世界を思い出させてくれる佳品である。

追ひつめてごきぶりに翅ありにけり 中川 美亀

逃げ足の速いごきぶり。ようやく追いつめて、今度こそ手を振り上げたたん、翅を使つて逃げられた。「追ひつめて」と上五でたのみかけ、「翅ありにけり」とさらに省略した表現が見事。臨場感と作者の驚きが直に伝わってくる。ただ「翅ありにけり」と、余計なものは全て切り捨てている。如何に省略化することが大事か、つくづく教えられる佳句である。

(藤野智弘)

御来光雲海潮位上ぐごとし 荒川 文雄

作者は山登りをされるし、雄大な自然を対象に詠われている句が多い。羨ましいことだが危険な体験もたくさんされてきたようだ。この句の雲海を潮位と見てとった把握、太陽と海の彩の対照が鮮やかに浮かび、彷彿とさせる。俗世界を離れた別天地、心の引き緊まる大きな句である。

落したる蜂の巢に蜂かたまれり 関森 勝夫

蜂と聞くと大群をすぐ連想するし、実際蜂の巢を見て通るときは、首を竦め、声を潜めて通りたくなる。落とされたのは雀蜂の巢なのであろうか。急に落とされた蜂は咄嗟の反応が出来ず執着している。「かたまれり」という具象が怨念を感じさせる。しつかりした写生が蜂の習性のおそろしさを感じさせ力強い。

ちりちりと息しきらきら草の露 三浦 晴子

作者の素直な性格がそのまま句に現れ、新鮮な感じをうける。重ねのフレーズは、ときとして冗漫になりやすいが、この句の場合は嫌味がなく、さわやかである。ちりちりと息するのは露の玉の動く音か、はてさて……。さわやかな句であり、作者も輝いている。異色の作品である。

ぼろ市に国旗の玉を探しけり

黄川田美千穂

探すものが国旗の玉だというから驚く。潔癖な性格の作者は市の隅から隅まで探したに違いない。「見つける」のではなく、「探す」という根底には、物を大切にしている心が刻まれている。想像を深くし、郷愁を感じさせる。落ちついた生活感があり、作者の人柄を思わせる作品である。

晒し葛 饅えし香はしる雪 催 谿 昭哉

奈良県宇陀での作品。底冷えのする暗い空模様、晒し葛と雪の白。白と白の対照からは、何かほんのりとした、匂いを想像するのであるが、饅えし香だという実態がこの句をひき緊めている。見た目とは違う現実。さむぎむとした作業場が見えてくる。これからの厳しい吉野の冬を感じる。

けんばなし 餓鬼大将も凡骨に 堀田 政弘

枳根の無骨さとガキ大将の取り合わせがおもしろいほどよくついている。周囲は開発によりどんどん変わっていくのだが、この木は高木となり実を降らしている。思い出の詰まっている木、童心にかえりなつかしさがこみあげてくる。礼儀正しい作者の模範少年時代を思うのである。季語がつかず離れず、やさしみのある、リズムカルな句である。

ニュートンの林檎の木なり 養虫垂れ 脇本千鶴子

ニュートンの林檎の木という字面のおもしろさもあるが、不思議な気持ちにさせられる。「養虫垂れ」にニュートンの引力をかけているとも思わせる。この林檎の木を深く追求する必要はなく、想像をかきたてる楽しい句である。実景であるからこそその断定である。叙情的な作品の多い作者には異色の作である。

——平成七年

入院の日より一人の夜長かな 佐藤 斗星

長年林火先生の主治医でおられた。医者と患者があべこべになった様子が滲み出ている。作者としては珍しい作品である。病院は、気丈な人をも気弱にさせる。悪い方へと気持ちが行き、孤独感をあじわう。消灯のあとの夜の長さはとてつもない。星を眺め月を愛でてもさみしさが込み上げてくる。「一人の夜長」に養生に専念しようとする哀感がある。しみじみと心を打つ句である。

暗がりに鉦の柄光りお元日 石橋 林石

作者は石材店をされており、林火先生の句碑も手がけられた。鉦の柄の艶に長い年月を感じる。清楚で礼節ある作者の新年の心構えが思われる。「光り」という鋭い把握が句を引き締めている。「お元日」ではと安らぎを与える。

(今井すえ子)

濱百句・第六

平成七年～十五年